

< 1年間の取組 >

第4章 各学年のプロジェクト学習

月／学年	1年
4月	3年間のテーマ設定①
5月	校外学習
ACS (Ago Community Session)	
6月	3年間のテーマ設定②
7月	安居の資源を調査
8月	
9月	調査活動のまとめ My Learning 準備
第1回 My Learning	
10月	小6インターンシップに向けて①
11月	My Learning 準備
第2回 My Learning (公開研究会)	
12月	小6インターンシップに向けて②
1月	学校紹介ガイドブックづくり①
2月	学校紹介ガイドブックづくり② 小6インターンシップ
3月	My Learning 準備
第3回 My Learning	

<第1学年>

1 学習のテーマ

3年間のテーマ

『AGO NAVI』

今年度のテーマ

「小6インターンシップを成功させよう」

2 1年間の取組の概要 (右図参照)

① 小6インターンシップへの取り組み

(1) 小6インターンシップに向けて①

毎年2月に実施されている「小6インターンシップ」に向けて実行委員会を中心に、今年はどうに進めていくか話し合いがもたれた。その結果、まずは当事者である小学生の声を聞きたいということになり、小学生に事前アンケートを実施した。アンケートから小学生が入学前に何を知りたいのか知ることができた。

(2) 小6インターンシップに向けて②

アンケートをもとに小学生のニーズを把握することができたが、それをどのように伝えるか話し合った結果、学校紹介のガイドブックをつくることになった。これは3年間の目標でもある「AGO NAVI」の練習にもなると考え決定した。

(3) 学校紹介ガイドブックづくり①

安居中のガイドブックを作成するにあたり、分かりやすいガイドブックとはどういうものか、各高校の学校案内を分析し、どのような内容がどう工夫されているか調査すると共に、同時に高校調べのキャリア教育も行うことができた。

(4) 学校紹介ガイドブックづくり②

高校のパンフレットを分析したあと、安居中学校の何を伝えたいかを考え、内容を「教育方針」「授業」「1日の流れ」「行事」「部活」「校舎」の6つのカテゴリーに分け、班ごとに調査活動を行った。担当ページを作っていく過程で安居中の魅力を再確認することができた。



<教育方針>



<授業>



<1日の流れ>



<年間計画>



<部活動紹介>



<校舎案内>

「安居中完全攻略本」の各ページ

(5) 小6インターンシップ リハーサル

完成したガイドブックを用いて、どの部分を特に小学生に伝えたいのか、どのようにしたらうまく伝わるかをグループごとに確認した。確認後、3グループが一組になり、中学生役、小学生役、アドバイス役に分かれて模擬練習を行った。しかし、練習の様子を見ていた実行委員から「ガイドブックについて読み込みが足りない。もう少し練習したい。」という要望があり、一人ひとりが小学生にどのように伝えるかを考え直し、再度リハーサルを行った。

② 成果と課題

<生徒の学び>

小6インターンシップを終えて、生徒より以下のような感想があった。

- ・6年生が「理解できる」「安居中のことを知れる」「読みやすい」ということに気を付けた。
- ・自分たちが伝えたいことを細かく書いてインタビューも入れ、興味を持ってもらえるように書いた。
- ・事実だけを伝えるのではなく、自分たちがやってみての感想などの実体験の内容も入れると分かりやすい。
- ・小学校から中学校になって何が変わったかということや、どう書いたらきれいに、小学生にわくわくしてもらえるかなどに気を付けた。
- ・6年生でも分かるように難しい漢字を使わず、短い文章で分かりやすく書いた。また、誤字がないか注意して見直した。
- ・ただ作るのではなく、相手自身がこの本を見てどのように思ってくれるかなどを想像しながら作成することが大事だと学んだ。

生徒は、ガイドブックを作成するにあたり、自分自身が何を伝えたいのかをよく考えること、それらの情報をどのようにデザインするとより分かりやすくなるかということ学ぶことができた。ガイドブックづくり②で高校のパンフレットを参考にしたことで、どのように表現すると見やすく、分かりやすいものになるのかを考えることができた。また、書いている自分たちは当事者であり、内容について十分に理解しているが、実際に読むのは安居中学校のことについて知らない小学生である。読んでもらう人の立場に立ち、小学生でも理解しやすいような言葉にしたり、説明書きを加えたりする工夫が大事であることが分かった。

学校紹介ガイドブックを作成していく中で、今後「安居地区のガイドブック」を制作する上での大事な視点を学ぶことができたと思う。

さらに、今回の学年プロジェクトを通して、生徒たちは「仲間との協力する」ことの大切さを学んでいた。

- ・自分の力だけでは無理だけど、チームのみんなと話し合い協力することで、見ていて面白いパンフレットができあがりました。協力が大事だと思いました。
- ・失敗したりいいアイデアが思いつかなかったりして全然進まなくても、チーム全体で協力して最後までやったらいいものが作れることを学びました。最後まで一生懸命やり抜くことが大切だと思いました。
- ・ガイドブックは自分たち目線で部活動について紹介し、6年生に分かりやすく読んでもらえるようにしました。話し合いの中で自分の意見を言うことも、他の人の意見を取り入れることも大事なので、それも含めて自分の考えを深めることも協力することも大切だと感じた。

また、ある一人の生徒の My Learning にこのような言葉があった。

「担当ページのリーダーになり、最初は周りを頼ることができず、自分で全部を考え指示を出して作っていた。しかし、自分自身がいっぱいいっぱいになってしまったし、新しいアイデアも浮かばなくて困ってしまうことがあった。先生からのアドバイスで、少しずつ他の人にも任せるようにしたところ、仲間からの新しい視点がもらえて先に進むことができた。また、自分が作成最終日に休んでしまったが、他のメンバーが話し合いながら進めてくれて、完成することができた。自分一人ですだけでなく、周りの人も頼りながら一緒に作り上げる方がよりよいものがうまれることが分かった。」

たくさんの生徒が「チーム全員で協力すること」「自分の意見・他の人の意見を踏まえてよく考えること」など、仲間と協力し作り上げることの重要性・楽しさを感じることができたようだった。



当日の活動の様子

## <教師の学び>

### －立山泰伸－

3年間のテーマを設定する際に、最初は「自分たちが何をしたいか」を考え活動内容を考えていた。しかし、ACSで2・3年生から、「目的が曖昧であること」「その活動内容で目的が達成されるのか」などの指摘をもらい、「目的を考えること」の重要性について実感した。しかし、これは教師側のミスでもあると考える。生徒と共に創るとは、生徒と同じ目線で横に並んで進むことではない。教師は生徒の横に寄り添いながら歩く盲導犬のようだと考える。生徒たちが間違っただ道に逸れそうな時に一歩前に出て、そこは危ないよと教えてあげるのが教師の役目ではないか。もちろん失敗から学ぶべきことは多いことは否定できない。しかし、場合によっては成功体験が生徒たちの自信につながり、自己達成感や自己有用感を味わわせることができるのもまた事実である。我々教師は生徒たちと一緒に歩みながらも、時と場合によっては生徒の一歩前に出て、成功へと導く役目を担っているのではないか。ただ、ここで気をつけなくてはならないのが、一歩前に入るタイミングである。常に前を歩いているのは教師主導となり、生徒たちは主役にはならない。失敗させてもいい場面と失敗させてはいけない場面の見極めが教師の力量につながるのではないか。そのために教師は、見通しを持った計画を立てることが最重要だと考える。そうすれば、生徒たちが失敗しそうな時、「今は失敗させても大丈夫」、「今失敗させると期限に間に合わない」などの判断が容易にできる。今後、学年として残り2年間のロングスパンの見通しを再確認し、生徒たちが目的に向かって歩めるようにしっかりサポートしていきたいと思う。

### －高田安希子－

今年1年間、プロジェクト学習に関して、先生方の考えや姿勢だけでなく中学2、3年生の活動を肌で感じたり話を聞いたりしながら、私自身学ぶことが多かった。その中で私の学びは、「生徒が主役」という言葉の裏には、教師がどれだけプロジェクトをデザインし続けられるか、それが肝であると考えた。活動ありきでなく目的をじっくり考えさせることや、活動を具体的に見越した教師の計画性とそれに伴う情報収集や、活動中の生徒の見取りの細やかさ。それらの必要性を常に意識し続けるような環境であった。

来年度に向けての展望として、生徒に「相手」を意識させて活動をさせたい。第1学年は今年度の活動の集大成として、小6インターンシップの企画・運営を行った。インターンシップ当日、小学6年生と小学校の先生から「知りたいことが全部載っていて、質問がありません。」と言われた。これから生徒は、「安居地区を多くの人に知ってもらおう」という目的のために活動していくが、このプロジェクトの成功は「質問がありません」というような、「読んで満たされた」という反応ではないはずだ。生徒と、安居をNAVIしたい「相手」の年齢や考えや反応を予想させ、活動に取り組みせたい。

### －赤澤聡美－

今回の学年プロジェクトを通して、「全体での共有の大切さ」と「どのタイミングで共有し、どのように気付かせるかを考えること」を学んだ。安居中完全攻略本を作成していると、それぞれのグループが自分の担当ページのみに集中していた。全体をみていると、「この部分、違うページに載せるといいのに」と思うことがあったが、教員が先走ってアドバイスしてもよいものか、と悩むことがあった。そこで、学年プロジェクトの実行委員で一度全てのページを見合う機会を設け、生徒自身が全体をみて、どう構成していくかを考え直した。そうすることで、生徒自身が「ここはこのように表現するとよいのでは」「違うページに載せた方がまとまりがあってよいのではないか」と気付くことができた。それぞれが創っているものではあるが、いずれは合わさり、全体が繋がって1つの作品になる。個々で活動していくが、必ず共有する場を設けて、全体の中で自分たちの部分がどう見えるのかを確認し、互いにアドバイスし合うことでよりよいものになっていくと感じた。また、どのタイミングで共有の場を設けるか、気付かせるかは、生徒たちの活動をよく見ていないと気付くことができない。生徒たちの活動の様子や考えていることを見取り、その機会を図っていくことが大事だと考える。